

街づくりの色彩計画・試案

—明るく落ち着いたある街並の色彩を求めて—

小林 英樹 北海学園大学教授



旭川・買物公園

I 認識と視点

1 「街並の色彩」の規定・性格など

- ここでは、とくに北海道の街並を念頭に入れて考えていく。
- 人には自分たちが住む空間を美化したいという本能のようなものがある。
- 顔の色つやは、その人の体調や元気さのバロメーターである。街並の色彩は、住民たちの充実度や活気や希望のバロメーターである。文化が時代の性格を反映するように、表層ともいえる街並の色彩とは、表層であるがゆえに、時代や街の状況や性格を如実に反映している。
- 街並の色彩とは、アスファルトやレンガ、コンクリートなど物質の色、塗装したペイントの色、動的な車や街行く人の衣服など人工物すべての色の他に、空や植物など自然界のものすべてを指す。さらに、ネオン、液晶などの看板、イルミネーションなど電気が作り出す色と、それ以外のすべての照明をも含める。



『街づくりはいつでも現在進行形』都市の中心街の一角、新しい街づくりが進行している。交差点の向こうの家並が、過ぎし日を彷彿させてくれるようだ。この街に色彩的統一感が生まれ、活気あふれる街に、のんびりと人が行き交う姿を想像して。

□ 街並の色彩とは、大きなキャンヴァスに描いた絵画のようなものである。色彩全体がまとまって一枚の作品が完成するように、周囲一帯の色彩的要素が響き合い、調和して、はじめて心地よい街並が生まれる。だから、たった一色といえども、作品を台無しにしてしまうこともある。

□ だが、同時に、街並の色彩とは、永遠に完成のない『モナ・リザ』でもある。ニュータウンを計画するのでない限り、街並の色彩とは、過去の制約を受け、それらを生かしながら、未来に向かって延々と描き続けていく作品である。時代とともに、描き手が次々に変わり、新たな者に絵筆を委ねていく。

2 条件・現状・課題など

- 北海道は四季の変化が大きい。パリ、ロンドン、アムステルダムなどヨーロッパの諸都市に比べ、随分、緯度が低く、南にあるため（函館がローマ・稚内ですらヴェネツィア）、夏は乾燥し、九州のように強い日差しに照射される。反対に、冬は、酷寒のシベリアから日本海を渡って来る湿った寒気団により、低温に見舞われ、世界でも有数の豪雪地帯と化すところが多い。
- 寒さのわりに明るい陽光、これが北海道の大きな特徴である。太陽光、そして、自然が作り出す四季折々の色彩などは、街並の色彩の背景や、色彩を演出する要因として重要な役割を果たす。
- 北海道における街並の色彩は極端に多様化している。190万人に迫ろうとする近代的大都会、札幌と、いくつかの中都市、さらに、それ以外の、過疎化が進む地方に点在する無数の小さな市町村との景観の違いは著しい。

□ 現在、北海道は、全体に沈みがちの経済的状況下にあるため、公共、民間を問わず、実利、実益を伴わない色彩的要素に対する配慮などは後回しになりがちである。これは、現下のところ、街並の色彩を考えると避けて通れないことである。

□ とくに、地方の中小の都市は厳しい状況下にある。かつては地元の産業によって賑わった街並や家並が、なすすべもなく放置されているのを目にすることもある。世界経済の構造上の変化の煽りをまともに受けてしまった北海道の多くの地方都市が抱える深刻な現実だ。若者が故郷を捨てて華やかな大都会に集中する傾向は止まる気配はない。

□ 別の深刻な問題として、地方の中都市周辺における広大な駐車場付きの大型複合店の進出が、旧市街地の衰退に拍車をかけている。輝ける現代と、くすんだ過去を象徴するかのような際立った対比、勝敗は歴然としている。北海道に多い、車で行動する習性の身について人々や若者は、新しさ、便利さ、快適さ、を求めてそこに集まる。旧市街地から、みるみる人の賑わいと活気ある色彩が失われていく。

3 今後の基本的姿勢など

□ 『街づくりの色彩計画』の主体は、そこに住む個々の住民である。広い空間や色彩的面積を所有する、公共的性格の強い団体や企業が果たす役割はきわめて大きい。行政は、色彩的視点から、街づくりのイメージなどを積極的にアピールしながら、同時に、住民の要望を実現する上で重要な役割を果たす。そのためには、当然、住民のコンセンサスを得るために、幅広い意見を求め、要望に耳を傾ける必要がある。

□ 今後も、北海道を代表する中心都市、札幌の充実と美化に力点が置かれるだろう。時代の趨勢に任せ、衰退するものを放置することは外部的には簡単だ。わたしたちは、視覚的な華やかさや近代的であることに目が慣れてしまったあまり、そこで生きてきた多くの人々の存在や街並の歴史を軽視しがちだ。古びたものをみすばらしいものと片付けずに、風化、老朽化などを歴史としてとらえ、優しい眼差しで見つめるところから向かい合いたい。この視点は、とくに、北海道の歴史を思えば、北海道に散在する数多くの小さな街並を見つめる際に、無視し得ない重要なものになる。



『庶民の匂い』

北海道のどこにでも見かける街並も、いまは、都市計画、防災や衛生上の理由などから、姿を消しつつある。年輪を刻んだ北の街の顔、かけがえのないよさをどうにか生かしたい。

□ 街並の色彩は、根底に常に経済的な力や援助を必要としていることは事実だが、小さくとも美しく咲き誇る野の花のように、自分たちの住む街並を心の通ったものにしたいものだ。豊富な自然を味方にし、人間の知恵と感性と努力を結集すれば、中小の地方都市も、やがて、街並の色彩は彩を豊かにし、芳しい香りを放ち始めるだろう。

□ 長期的展望を打ち出しながらも、比較的金がかからず、効果の大きいものを優先させることも必要だろう。街並を築き上げていくコンセプトや指針の上に乗って展開していけばよい。多くの人が簡単にイメージできる方向性を示せれば、個々の動きがつながりをもってくるだろう。

□ 照明も、果てしない照度アップ追求を前提にしない、街並の色彩の豊かさを創出する本格的な研究が活発化すべきだろう。基本的に、全体として、大都会の繁華街やデパート、コンビニ、複合大型店などの明るさと決別しなければならない。それは、地方都市の復活・再生にもつながっているし、基本的に、低コスト、省エネを根底に据えるものであろうから、将来の地球規模での広がりをも予想させる。大量に資源を浪費し、それに見合っただけの利益を期待するというアメリカ流の商法に、いかに対抗できるのかという試練が課されているともいえる。ただ、暗く惨めなだけで、夢も託せないで終わりはたくない。

□ 街並の色彩を創り出すのも、良し悪しを判断するのも、最終的にはそこに住む人々の色彩感覚である。一朝一夕に色彩感覚が研ぎ澄まされることはないが、ちょっとした学習で随分役に立つ。色彩に関心が向けば、知らずに色彩感覚は向上するだろう。

□ ここでは、各市町村間の違いを認めた上で、多くの街並で共有しうる問題点や、応用できる色

彩的要素を取り上げるように努めた。例に挙げた写真が札幌のものであっても、投げかける問題は他のすべての街並の色彩へ敷衍^{ふえん}していく性質のものである。なお、言うまでもないことだが、ここに挙げた写真例は、観光ガイドやきれいな街角紹介などとはまったく性格を異にする。

II 新たな街づくりの始まり

1 自然のもつ色彩的魅力

A 空など

□ 街並をカメラに収めようとして驚かされるのは、空の美しさである。人間は、たいてい、自分の目の高さにあるものを見、必要な情報を求めて生活しているが、ファインダーで覗^{のぞ}いた世界は半分が空なのだ。抜けるような青空、そこに浮かぶ



『雄大な自然の背景』

国道沿いの街並。一見殺風景に見えながら、どこかすがすがしい空気が感じられる。8月、抜けるような青空に白い雲が浮かんでいる。大空は、北海道の街並の貴重な背景だ。



『街を生かす樹木』

旭川駅前の『買物公園』の一角。近代的なデパート、明るく深みのある地面の黄色いタイルなど、都会的な空間を作り出しているが、この広場の陰の立役者は樹木である。プラタナスは生命力が強いという長所のほかに、葉の明るい表情、幹の淡いグレーがかった緑のまだら模様が都市空間に合っている。

さまざまな表情の雲、重く垂れ込めた憂鬱^{ゆううつ}な空、どれも、北海道の自然に特有の、誇るべき色彩である。北海道の大地で、無意識のうちに、人は空を感じている。

□ 空だけではなく、澄んだ水、季節や天候によって表情を変える海、四季折々彩りを変える山野の樹木、海岸の絶壁など、北海道の魅力の中心は豊かな自然だ。本州などからやってくる観光客が憧れるものは、人の手に触れられていない自然である。街並の枠から外れるかもしれないが、手付かずの自然を残すことが、北海道に住む者の使命だろう。

B 樹木・草花

□ 北国の街を彩る樹木は広葉樹と針葉樹である。それぞれには、異なった表情とよさがある。樹木は、人工的空間に持ち込まれたときには、自然が作り出した雄大な生ける彫刻である。それに対して、庭先や公園などの花壇は、地面に描かれた可愛らしい絵画である。花は、本来、鑑賞向きであり、単に色彩を楽しむというより、至近距離から花びらの表情までゆっくり味わうものである。

□ 一般的に言って、広葉樹は太く立派な表情の幹があり、幹からは適度に曲がりくねった太くたくましい枝、さらには細い枝があらゆる方向に伸びている。太陽光を透かす豊かな緑や、涼しげな影だけではなく、広葉樹の作り出す空間は、人々を優しく抱きこみ、落ち着きを与えてくれる。街並の色彩で主役を任されるのは、明るさを感じさせる広葉樹である。

□ 針葉樹の、濃い緑、硬い葉がもつ表情は、広葉樹との組み合わせで空間に変化を与えてくれる。北海道の紅葉の艶やかさを強調し、特徴づけてくれるのは、点在する針葉樹の暗緑色である。広葉樹が緑を落とし、枝をさらけ出す半年間、針葉樹は風雪に耐えながら、北国独特の風情を醸し出している。広葉樹とのバランスを考えて植えれば、寡黙^{かもく}で凛々^{りり}しい容姿を際立たせる。

□ しかし、針葉樹の木の肌、葉の表情は刺々しく、地面に近いところから細く短い枝を張るものが多い。そのため、針



『公園内の大きな樹木』

都市の歴史を刻む古木が枝を広げさわやかな木陰を作っている。その下のベンチでは、歓談し、くつろぐ人々が、その恩恵に浴している。ことによると、最も贅沢な時間の過ごし方なのかもしれない。



『住宅地の並木道』

長く続く直線道路、街路樹が豊かな空気を生み出し、道行く人やドライバーの気持ちを和やかにしてくれる。もし、この道から街路樹を取り去ったら、殺風景な景色に変わってしまうだろう。春には桜が咲き誇る。街路樹は街並の色彩の魔術師だ。

葉樹を街路樹に用いると、人でごった返す雑踏の空気を包み込むことができず、孤立し、暗い感じの街並を作ってしまうこともある。植物が生き物であるために、容易に植え替えが効かないことを考えれば、街路樹や公園などに針葉樹を採用する際には慎重を要する。

□ どこに何の木を選ぶのか、葉の大きさや形、幹や枝振りの表情が多様多様なだけに、選択には十分配慮が必要だ。色の使い方同様、無神経に多くの樹木を採用すると空間を壊してしまうし、視覚的に合わない二種類か三種類の樹木を併用するのもまずい。植樹は、空間を造形するきわめて高度なアート性を要求されるものであるから、庭師のような専門家以外に、地元の画家や彫刻家などにアドバイスを仰ぐことなども必要であろう。

2 人の手で創り出す色彩

A 独自性を求めて

□ 産業が色濃く影響を与えていた過去が幕を閉じ、街の景観や色彩は、経済的展望の厳しさを背景に、新たに、第二章が始まろうとしている。それは、都市を生み出した必然性である産業の顔が



『独自性を生かした岩内町の一角』

岩内湾を望む街並。地下に埋められた電線、歩道だけではなく、車道にも色のついた敷石が張られている。ここはどこだろうか、遊園地のようなくつろいだ気分にしてくれる街並。スーパーや海産物を売る店、寿司屋や趣味のよい喫茶店など一通りある。海側には、右手にコンクリートの打ちっばなしの道の駅があり、左手に親しみやすいデザインの、コバルトブルーのタイルを張った小さな交番がある。その奥の広い公園の一角に、郷土の画家、木田金次郎の作品を展示する美術館がある。それらの光景からは、ひとつのイメージに沿った街づくりの意図がうかがえ、その意図からは美術家の神経を感じさせる。

消え失せた分、没個性化、画一化の危機をも孕んでいる。

□ 地形、産業、歴史、気候、人口…数え上げればきりが無いが、自分たちの街を特徴づける要素はたくさんある。街づくりに際して、他の都市や街並との違いを強調することにこだわり過ぎることも、話題性を狙うということも自分たちの将来のためにならない。評判をあまり気にせず、無理せずに、特徴やよさを生かせるような街づくりに立脚できてこそ、本物だ。

□ そのためには、アイディアを出し合い、知恵を絞り、コンセプトやイメージを固めていく作業がいる。少人数だけで決定した方針では、多くの人が共有しにくい。常識にこだわらず、斬新なアイディアを出すことができ、それに多くの人が共感できたら素晴らしい街づくりが始まるだろう。

B 街並の色彩の構成要素

□ 道路標識をはじめ、金融機関、コンビニ、様々なチェーン店の看板など比較的高彩度の色彩は、街並の色彩上、動かしがたい大きな構成要素である。それらは、目的こそ異なるが、宣伝効果を期待することから目立つことを旨とする、比較的大きな面積を占める色彩の要素である。

□ 高速道路の案内表示など、世界標準のものまで含め、道路標識は街並の景観を前提に色やデザインが決められていて、色彩的視点から見ても街並にメリハリを与えてくれることが多い。趣味の相違や、どれも多少目立つことを我慢すれば、企

業関係の看板は、企業イメージアップに貢献するものでなければならず、洗練されているものが多くなっている。それらと共存すること、それらを利用することを前提に街並の色彩を考えたい。一般的に言って、大企業ほどデザインにかけるものも大きく、デザイン的にも優れている。

□ 真っ黒なアスファルトに引かれた車線や歩道を示す白いラインは、街並の色彩に構成的な点で大きく貢献している。

□ ありがたくない負の構成要素として、灰色の無機質な電柱があるが、車道や狭い道では家の外壁に接するように立っている。日本の近代化の歴史が残した負の遺産である。色彩ではないが、電線は雄大な空を蜘蛛の巣のように遮っている。

□ 道路標識、看板、路上の白線などに対して、賑わいを生み出すために、目立つ色を置いてそれらと競い合うやり方もある。その場合は、同系の色、反対系の色いずれであっても、高彩度の色を対比させるとよい。賑わいが出る半面、煩雑になるので、色彩の響き合いに配慮する必要があるだろう。大きさ、デザイン、色の質（例・ペイントか、明かりか）などでも、組み合わせの効果を生かせるように考えたい。

□ あるいは、鮮やかな色彩を加えることによって、街全体が色彩過剰になるのを恐れるなら、目立たない中間色を置き、落ち着いた感じを出すのもよい。花壇や街路樹など植物の色も鮮やかな看板の色彩に響き合いを与えてくれ、鮮やかさをやわらげてくれる。いずれにしても、街に出てさまざまな角度から眺め、そこに合った色を決めることが大切である。有無を言わず、強者に先手を打たれる、弱者側の完璧な防御策のマニュアルもほしい。

□ 市電やバスやタクシーなども、街並の色彩を舞台に移動する色彩（役者）ととらえることが大切だ。乗り物などの色の評価については、走る背景の街並の色彩を抜きに論じられない。沈んだ色調の街並には原色系の赤などの精神を活性化してくれる色などもある。

□ 北海道の乗用車の主流は、無難で飽きがこないという理由からか、白とメタリックのグレーだ。紅葉が終わった時期からの、やや色彩に飢えた目には、小型車のパステルカラーが妙に可愛らしく映ったりする。それは、色の乏しくなり出す時期の、街並の色彩のヒントにもなる。



『路面電車』

宣伝をしながら、車体を美しく見せる視点、景観に配慮することを優先させる原則を忘れていない。古い街並を背景に、この路面電車は、雪があってもなくてもそれぞれ美しく映えている。

□ とくに、雪に埋もれた白一色の世界では、交差点の信号灯、テールランプ、赤い乗用車などの色彩も心に潤いを与えてくれる。雪の中での安全性などから選ばれるはっきりした色という観点は、たまたまここでは色彩的よさと一致する。このことは、雪の中で、人は、曖昧^{あいまい}模糊^{もこ}とした色よりも、ある程度ははっきりした色を求めていることを示している。赤、紺、緑、黄、朱、紫など、雪景色には合う。真っ白い紙に、何色のマーカーで線を引きたいのか、そういう発想で冬に合う色を考えても面白い。

C 街並の色彩の生かし方

□ 北海道の街並の色彩を考えると、コンクリートの打ちっぱなしや煉瓦など、ごく少数を除いて、天然素材の色を見ることは少ない。京都のように木材を空気に^{さら}晒しておけば傷みは早いし、寒さ対策など考えると、ますます着色済みの新建材に頼る傾向が強くなるだろう。

□ 北海道のどの街でも、街並を彩る主役は、建物の外壁などに見られるように、白に近い明るい色である。それらは明るい陽光に輝き、雪に溶け込み、現在のところ、北海道らしさを作り出しているのかもしれない。だが、それは淡く単調に、ときに、殺風景に見えるときもあり、色彩の乏しさの傾向を作り出してしまふ恐れがある。町外れにまばらに立つ家並が深い雪に埋もれていると一層寂しい。ほのかな色味が欲しい。

□ 街並を絵として見つめ、全体の中で個々の色を感じ取る習慣が身につけば、いたずらに、「あの色はいい（好き）」「この色はよくない（嫌い）」というような部分的な評価をすることはなくなるだろう。



『雪に合う色（晩秋から初冬）』

雪が降り始めるころ、辺りは枯れ枝が目立ち、分厚い雲が垂れ込める日が続く。急激に色彩が消えていくこの時期から白一面の雪に閉ざされる冬、淡い色調の、ピンクやネーブルスイエロー、水色やエメラルドなどといったパステルカラーの建物に目が留まりがちだ。



『街並は一枚の作品』

住宅が立ち並ぶ街中の一角、外壁の色は、申し合わせたかのように統一感がある。どの建物の色も、ほとんど同じ比率の『グレー』（本文参照）を混ぜ、元の色、たとえばレンガ色、黄色、緑色などを和らげている。その中に、『グレー』をほとんど混色しない濃い色を窓枠などに用い、アクセントを効かせたかたちで外壁の広い中間色を引き締めてくれている。

□ 将棋の手のように、攻め方はいく通りもある。赤に対して青というように、対をなすような一色を置き、さらに、黄色などと置いていくうちに、最初、目立ち過ぎていた色が気にならないようになる。あるいは、高彩度に対しては高彩度、赤系に対しては赤系というような置き方でもよい。

□ 状況に応じ、将来の展開も考え、色彩計画は進んでいくが、思わぬ偶然的な要素が飛び込んできたりする。意外な効果が出たり、逆に、周囲が迷惑することもある。いずれにしても街並の色彩は流動的であるから、臨機応変、常に街並を一枚の絵として見ていきたい。

□ 隣の色や周囲の色との関係で色の選択をしなければならないこともある。鮮やかな色の隣に並べれば、古風な味わい深い色も薄汚く見えるだろうし、周囲が落ち着いた色調であれば、抑え目の色を用いなければお互いがぶち壊しになってしまう。

□ 辺りが暗ければ、そのよさを一層発揮できる、メランコリックな風情もあるアート性の高いネオンや、オランダの田舎町などで見かける、小さな電球がいくつか灯った程度のイルミネーションを、街灯代わりに生かすことも楽しい。廉価になれば、液晶のワンポイントの効果も地方都市の暗い夜の特殊性を生かせる。闇をベースに、少ない消費でファンタジックな空間を作り出す、大都会にはできない攻めの発想だ。

□ 歩道や車道の敷石化は、いつもその上を歩く住民に対してアピール度が高い。天然石や煉瓦のよさには迫れないが、着色したコンクリートブロックでも美観にこだわる気持は伝えられる。地元で石が採掘できる地方では、品質やコストなどに

難点があっても、積極的に活用すべきだろう。その街やその地方にしかない敷石の歩道なども素敵だし、レストランなどの室内でも利用できるかもしれない。

□ 小樽軟石で作られた運河沿いの倉庫群、煉瓦造りの函館倉庫群やサッポロビール園など、石や煉瓦の持つロマンを漂わせた素材は、古くて新しい永遠の魅力である。使う面積以上に、印象度の高い物質性がある触覚的な記憶も手伝い、そこを訪れた人の記憶に強く刻まれる。やり方によっては、産業に発展する可能性すらある。

Ⅲ 鍵を握る『いい色』

A 料理の味付けの感覚で

□ 鍵を握る『いい色』とは、味の効いた色、あるいは、ほんの少し抑えた色のことである。深い色、上品な色と言い換えてもいい。

□ 淡い色も、濃い色も、色味のはっきりした色も、曖昧な色も、暖色も寒色もみな含むので、特定の色の押し付けをするのではない。『いい色』を作ることにに対しては、多くの人が無頓着である。責任の半分は、色彩感覚を天性のものと最初から決め付けてしまいがちの、学校での美術教育にあるかもしれない。塩加減、砂糖加減から、練り方、火加減、茹で時間、素材の鮮度など、数えればきりが無い料理の習得に比べれば、『いい色』を作ることは、はるかに簡単だ。

□ 街のイメージ作りのために、街並の基本色のようなものを設定することはいいが、誰もがそれだけに依存すれば、単調に陥り、創造性や活気が生まれない。『いい色』の自由な活用が鍵を握る

だろう。

□ 青系はいいが赤系はよくないなどといった、特定の色を押し付けることは避けたい。ここでは、すべての色に通じる色作りのコツを記すのが目的である。パソコン画面で選んだ色を、ペイントなどの絵具で再現するのは至難の業である。実際の色作りには、印刷インクや絵具の色見本から色を見つけ出す方が作業は簡単だ。

□ 空気や水蒸気が風景に落ち着きを与えるのは、そこにモノトーンのフィルターがかかるためである。鮮やかな色でも、空気中に置いてみると意外に収まるのもそのせいだ。すべての色が同じ色を含んでいると落ち着いて見えるという性質を利用して、『いい色』作りを行ってみる。

□ 赤や青や緑などに白だけを混ぜた、目立つが浅いだけの色をよく見かける。色を扱い慣れていない一般の人の陥りやすい傾向である。これでは、綺麗過ぎて周囲から浮き上がってしまう。どうも、混色を「汚す」と感じてしまうらしい。純白は透明すぎて色彩のフィルターにはなりにくいのだ。こういった系統の色（純色）ばかり使うと、洗練されていない野暮な街並が出現してしまうだろう。

□ ポイントは、白の代わりに、赤、青、黄の三原色に白を加えたグレーを使うことである。そのときにできるグレーは、混合比によってさまざまな色調のものができるが、三原色が混ざっていれば大差はない。状況に応じて判断すればよい。白を多くすれば明るいグレーができ、少なければ暗いグレーができる。

□ そのグレーを、求めたいと思う色に混色すればいい。赤が欲しければ赤に微量混ぜる。同じように、紺や紫、あるいは黄緑や朱に微量のグレーを混ぜる。一回で求める色はできないから、いい色ができるまで何回か試みなければならない。混色によって出来上がった色と、薄め役に使ったグレー系の色を並べると、まず、間違いなく好配色の組み合わせになる。

□ ヨーロッパのものを機械的に持ち込むのは策がないが、いいものの原理を生かすことは大切である。北海道より高緯度の都市が多いヨーロッパの街並の色彩のポイントは、まさにここにある。曖昧な中間色は誰でもすぐにそれとわかるが、原色と思われるような鮮やかに輝く色は、微妙な隠し味が潜んでいることを見逃してしまうことがあ

る。わずかな三原色で作ったグレーが決め手だ。色彩の作り方にかけるとは、ヨーロッパ人は伝統を踏まえた名料理人である。彼らから学ぶべきものは多い。

B 北海道のよき伝統を育むために

□ 最終的にその国や地方の色彩の鍵を握るのは、そこに住む人々の色彩に対する配慮の有無、大小、あるいは、色彩感覚の良し悪しである。色彩感覚は、半分が天性のものであるとしても、半分は意識、訓練によって確実に克服できる。つまり、色彩感覚は向上するのだ。だから、即効薬とはいかないまでも、教育機関や自治体の創意工夫で住民の色彩感覚は必ずよくなると言える。ある期間かけて、系統的に色彩に対する理解を深め、色彩を愛する気持ちを育てたい。街並の色彩の答えは、基本的には住民一人一人が出すものだからである。何十年か先に、北海道の人は色彩感覚がよい、そういわれる土壌になれば嬉しい。

IV 未来に夢を託して

独立しているかのような、最も表面的な世界、街並の色彩というジャンルが、実は密接に経済や人間のしあわせなどと切り離せない関係にあることを痛感し、問題の奥深さを再認識させられた。行政も含めて、地域の人々の、自分の街を愛そうとする気持ちが少しずつ結実していく。そして、地方の多くの街並が、人間の温もりを湛えながら、控えめに光り輝くときが来る、そういった未来を夢見ている。拙稿が一助になり、それぞれ独自の街並作りに少しでも参考になることを期待して。



profile

小林 英樹 こばやし ひでき

1947年 埼玉県川越市生まれ

東京藝術大学美術学部油画専攻卒。北海学園大学教授。

担当教科 『芸術論』、建築学科の学生のための『造形演習』。

著書 『ゴッホの遺言』（日本推理作家協会賞・評論その他部門受賞）、『ゴッホの証明』『耳を切り取った男』『色彩浴』。

北海道開発局の『まちづくりメールニュース』に『街の色についての提言』を執筆している。